

山と博物館

第23巻 第10号

1978年10月25日

大町山岳博物館



鹿島嶺を望む

撮影 伊藤則夫

山岳博物館への期待

「博物館と私」と題して福島融さんが寄稿されたのを拝見し、博物館設立にあたり大変なご熱意とご努力が窺われ頭の下る思いがした。自然的環境に恵まれたこの地に、多くの郷土愛に燃えた方々が今日の礎を築き、地域住民への啓蒙と、更に内容の充実のために献身的な努力をなされ、他地域に見られない全国唯一といわれる特色ある博物館に育て得たことは、大町市民の誇りとして高く評価されるものである。

わたくしは、児童生徒を連れて貴重な展示資料を拝見し、さすが山岳博物館の名にふさわしいと実感をもった一人である。名は体をあらわすというが、ずばりこれだというものを参観者に与えることが必要である。

県内外にも特色をもった博物館、資料館、郷土館、記念館等がある。特に最近観光面でも力を入れ、多くの参観者の心を引きつけているものがある。その館はそれなりきの宣伝もされておられると思うが、それと相まって内容の充実と、特色をもったところに多くの参観者が心を引かれて訪れるように思われる。

最近小谷村では小谷という特有の気候風土にかかわる住民生活と深くかわつてきた資料を整理し、未長く保存する民俗資料館が出来た。お話をきくと年々入館者も増加しているとの事。又札幌市郊外にある北海道開拓記念館、ここは名の通り明治初年北海道開拓使がおかれてより、現在の開発をみるまでの開拓の歴史が大変より整備され、参観する者に膚で感得されるように工夫されておられたことを思いおこすものである。

さてわが博物館も関係者の並々な努力にもかかわらず館の老朽化と狭い現状は致命的である。このような現状から館の改築問題が起ってくるのは無理のないことである。この機をとらえ、山岳博物館のイメージをダウンさせることなく、将来を見通し、より幅をもった、より期待される博物館を願うものである。

(山博協議会委員 山岸暢男)

安曇の民話

(4)

長 沢 武

1、動物と民話

トースイ鳥

青葉の頃の深夜、人の寝静まる丑三時、山のかなたから聞えてくるトラツグミの、ヒヨ、ヒイーという啼き声は、何とも、もの悲しい悲壮感に充ち、殺気さえ帯びているが、乗鞍山麓の番所では、この鳥を「トースイ」と呼んで、次のような物語りがある。

昔々のこと、親に許されない二人の恋人があった。二人は親の反対を押し切って結婚しようとしたが、封建社会のことま、ならず、二人はついに高い岩の上から谷に飛び下り心中してしまった。その遺体の処理に当った村の人達は涙なしにはいられなかった。

悲しい心中があつてから村には噂が立った。「真夜中になると青い火が西の空を飛びかい悲しい泣き声が聞こえる」と。人々は外に出西の空を見ると、此ちらの山からトースイという声が出て空を飛ぶと、彼方の谷からトースイという声が出てき、何ものかが此ちらへ飛んでくる。だが互に呼び交うその声は空中で行き交うだけで、永遠に結ばれることはないのだ。

山鳥の尾

昔、有明の里に葉草採りの弥左衛門という男が住んでいた。或日彼は山へ行ったま、帰

らなかつた。村中で探しても見つからないので、誰言うともなく魏石鬼にさらわれたら、かわいそうにということ、後に残された妻のおさくと三才になる弥助はみじめだった。

それから二十年の歳月が流れた十二月二十八日のことだった。弥助は母に頼まれ穂高の町へ暮れの買物に行く途中、山路の端で一羽の大きな山鳥が、ワナにかかつて苦しんでいるのに出合つた。日頃慈悲深く育てられた若者は、それを見たと不びんに思い、ワナをはずして山鳥を逃してやり、懐の五百文の金をワナに結びつけて家に帰った。

大晦日の夜が来た。年取り魚もない貧しい夕食をしながら、放してやつた山鳥のことを親子して話している、見知らぬ若い娘が尋ねてきた。身寄りのないこの娘は弥助の家に居つくことになり、やがて弥助の嫁となる。

その頃、有明山に棲む魏石鬼の悪業は都へも知れ、坂上將軍が退治に向いてきた。しかし鬼共は強くどうしても征伐することができない。將軍は日頃信仰する観世音菩薩に祈ると、夢枕に三十三節ある山鳥の尾の矢を用いよとのことで、村々へ觸れを出し、その尾を探すが見つからない。弥助は父のかたきをどうにかして取つてもらいたいと幾日も山鳥を探したが見つからない。その時「私にも探させて下さい」と妻が言い出し家を出て行きやがて見事な尾を持って帰ってきた。尋ねると、「何を隠しましょう、私はあの時助けてもらつた山鳥です。御恩返しにおそばに仕へよう」と今日まで過して参りました。この尾には私の魂が宿っています。最後の御奉公に役立てて下さい。」と言ひ終ると彼女の姿はそこにはなかつた。

こうして將軍は無事鬼共を退治することができた。今でも山鳥の尾の十三節以上あるものには魔力が宿つてい、夜青い火を放つて飛ぶといわれている。

弟恋し

時鳥(ホトトギス)についての民話は、全域的には、盲の兄を持つ弟は、いつも自分ではまずい物を食べて兄に御馳走を食べさせていたが、それと知らぬ兄は、弟は自分よりももつとうまい物を食べているに違いないと、弟を殺して腹をさいて見ると、意外にも弟は芋の蔓や雑穀ばかり食べていることが解り、その罪で鳥となり、オトツト恋しと日に千度啼かないと水が飲めないという話であるが、白馬山麓のものはこれとは反対の話である。

昔兄弟があつたが、兄は慾ばりで力づくでいつも弟の分まで取つて食べてしまふくせがあつた。或年の冬母が死んでからはそのくせは一層強くなり、弟がこの世になければ自分はその分までよけい食べられると思ひ、春の山に鬼つづじ(レンゲツツジ)の咲くのを待つて、そのおおいしそうな花(実は猛毒)を弟に食べさせ殺してしまつた。その罪で兄は鳥にさせられ、そこを追い出されてしまつたが弟を殺した鬼つづじの咲く頃になると、何処からか毎年飛んできて、弟恋し〜と日に八千回も、咽から血がでても啼き続けるのだ。だから兄弟は仲良くし、食べ物などばい合いなどしてはいけなないと子供にいましめてい

狼(おおかみ)

狼は山犬とも呼ばれ、安曇地方にも明治十年頃まで棲んでいて、各地に沢山な民話が語り継がれている。その内容を分類すると、
①恐しい狼が口を開いて人のくるのを待つていた。見ると咽に骨をひっかけて苦しがつ

ているので、それをとつてやつたらお札に何かをやつてくれた。②狼は人の後を一定の間隔を保つてついてくるものだ。これを「送り狼」という。もしころぶと喰われてしまう。家の近くまで来た時「御苦勞だつたナ」というと、静かに帰って行く。③人が死に土葬すると、夜狼が出てそれを掘り返して困つた。それで大除けといつて竹の棒三本を組立てて墓の上に立て、それに縄を下げてワナにしておき、翌朝は見届けといつて早く墓参りしたものだ。④狼が子を産んだ時は村中で赤飯を炊き重箱などに入れて菓の入口へ持つて行ったものだ。そのおすると翌朝は必ず空になつた重箱が家の戸間口に返つてあつた。⑤狼は人の度胸を見るといわれている。逢つた時はあわてはいけな。⑥狼は火が嫌いである。千国街道など山道を夜行く牛方は、先頭と後の牛に松明をつけ、警戒したものだ。

狐の話

狐は昔から人を化(ばかす)といわれている、それになつた話がある。沢山語り継がれている。狐は狼と違つて現在も北アルプス山中に棲息しているが、狐に化かされた事例は太平洋戦争の頃までで、それ以後は聞かない。

狐についての民話は、大別すると三つに分れる。一つは善良な狐の話で、その為稲荷様を祠つてやつた類のもの、二つ目は狐の燈籠揃えの話で、夜向う方に提灯の火がちら／＼見え、次ぎ／＼に移動してはパツと消えたり点燈したりする話で、そのような時には狐が自分の近くに居るといふ。三つ目は狐に化かされた話で、一番多く、油や油揚げなど持つて一人で歩いていて何時か化かされ、気がついてみると油や油揚げが皆とられてしまつていふという筋書きで、ユーモラスな話が多い。



2、植物と民話

大桜草

今を去ること八百年程前は、白馬岳の麓の小谷四ヶ庄と呼ばれる辺は、京都の六条院領で、千国の庄とい時々都から皇室関係のお役人が訪れることがあった。

その頃佐野村の庄屋の家に美人の一人娘がいた。ある年のこと、長い冬ももりから解放された五月の空の下、娘は下女をつれて蕨探りに出かけての帰り道であった。何処からともなく美しい笛の音が聞えてき、田舎では見ることもない貴公子が現れ、「私は旅の者、この村に親切な庄屋があるとのこと案内してくれぬか」と言った。早速連れて帰りその夜は若者の都の話に花が咲き、都への憧れはやがて若者への憧れと化し、恋が芽ばえて行き、娘は都での暮しを若者と約束するに到る。

ある朝暗い中に起きた二人は、あれ程反対する親達に知れぬよう、こっそり家をぬけ出した。然し佐野坂へ着くと娘はこれが見おさまめかと我が家の方四ヶ庄平を見下した時、異様な黒雲が白馬岳の方から飛んできてあたりは急に真暗になった。と、今までそこに居た貴公子の姿はなく、見るも恐ろしい悪魔が立っていて、娘を驚ぶかみにするところから、「と笑い、「俺の正体が解ったか、我こそは白馬岳に棲う赤婆大王」と言うが早いか娘をさらって白馬岳向って飛び去った。

娘はこうして悪魔に喰い殺され、その生血は大雪溪から白馬岳にかけて点々と赤く続いた。それから幾年か経てそこに可憐な高山植物が咲いた。その花は未だ見たこともない血の色をした大桜草だった。

娘の形見山アジサイ

小谷の村は何処も谷深く雪の多い所である。隣村へ行くには尾根を越え谷を渡って行かなければならない所ばかりである。そこには狼がいて人を襲うので、女子供の夜の一人歩きは堅く禁じられていた。

ところでこの村に手巻きという母と二人暮しの貧しくも美しく、氣立てのやさしい孝行娘がいた。そこらわいにはめつたに見ない村中の評判娘だったが、ある時母の病の葉をもらいに里の医者へ行き、遅くなって村の峠道を急いでいて行方不明になってしまった。村中で八方手をつくして深してもついに川端で、彼女の櫛を捨うことができただけだった。そして村人は誰言うともなく、「かわいそうに、狼に喰われてしまったらしい」と話し合うのだった。

こんなことがあつてから幾年かして娘の櫛が落ちていた川沿いの陰地に、今までその辺では見かけなかつた紫もあざやかな清楚な感じの山アジサイ(エゾアジサイ)が咲き、娘の命日を待って散つて行くのだった。

娘の化身シラネアオイ

五竜岳の裏山は昔からカモシカの巣といわれ、遠見の尾根を通つて地元の人達は狩に出かけたものだ。カモシカはおとなしい動物で、新雪の深い時は雪に足をとられて動きがぶる。そこを犬に追わせて捕えるのでカモシカには犬とコスキと小槍があればよかった。

四ヶ庄の獵師茂一も毎年カモシカ捕りに行く一人で、彼には一人娘のゆきがあつた。ゆきは雪の精のような白い肌で、特に薄紫の着物が似合い好んで着た。また茂一は獵犬アカを飼っていたがゆきの可愛がりようは格別だった。

今年も冬がきて山は新雪に埋り、茂一は仲間と猟に出かけることになった。それを麓ま

で送って行き別れをおしむおゆきとアカ。だがアカはまもなく雪崩に会つて死ぬ。それを聞いて涙ながらに探しに行つたおゆきも同じ場所雪崩に会つて死ぬ。やがて春が来て雪が消え、谷間の草木が芽吹く頃おゆきとアカの遺体が見つかったが、やがてそこに咲いたのが山ボタン(シラネアオイ)だった。

タラの木

安曇地方ではハリギリのことをエンガラとかイヌダラと呼び、山菜の王様といわれるタラノ木と区別しているが、タラノ木が腕の太さくらいになると枯れるのに対し、こちらは数百年の大樹が稀にあり、老木となるとイチヨウのように枝腋から乳房のようなコブが下つてくるので、乳の出ない婦人の信仰の対象となつてはいるが、それには次のような話がある。

昔身分のいやしい男と熱い恋に落ちた上藤が、きびしいおとがめと冷たい仕打ちに都にいたことができず信濃路さして駆け落ちしてきたが、既に身重になつていた女性はいつにアルプスの見える山のとりに月満ちて一人の女子を生んだ。しかしはげしい気苦労と長途の旅の疲れで乳房はしなびて少しも乳が出ず、ついに子供は間もなく死んでしまった。悲観にくれた二人は愛児の遺骸をそこに埋め墓標に立てたのがハリギリであつて、その木はやがて大樹になつて行つた。愛児を失つた二人は生きる望みも失い、共にその近くで心中したが、そこにはその後地元の人により地蔵が祠られ、今では地蔵堂も出来、墓標のハリギリは四抱えもある老樹となり、大きな乳房を下げて多くの女性を助けている。

この木は昔有明山麓にあつたものは二十年程前に枯れてしまつたが、小谷村北小谷の千国街道古道といわれる地蔵峠道にあるものは今村の天然記念物の指定を受け健在である。

源長寺の梁になつた唐松

昔南小谷の千国の源長寺の虹梁は、中三尺(九十cm)長さ十六間(二九m)もある見事なものだったが、これは蓮華山(蓮華温泉の裏山)近くの二本唐松と呼ばれて居る所に生えていた大きな二本立ちの天然唐松だった。

途中で陽が暮れたので翌日続けて伐ろうとして行くと、これは不思議昨日周囲に飛び散つた木屑は皆元通りに喰いついていてどうしても伐ることができない。そこで源長寺の住職を頼んで行つてお経を上げながら伐り、木屑は出るはじから焚いて伐つたらようやく伐れたという。今も双又になつた木は天狗の宿り木といつて伐れることをいまいましているし、伐り始めた木はその日の中に伐り倒すものだといわれている。

大杉と民話

安曇地方特に佐野坂以北は杉の本場であるので昔から大杉が多かつたようである。これらの大杉は皆民話を伴っている。伐り始めたら忽ち木片がとび返つて元通りにくつき、鋸でひけば血が出たとか、伐つた人に祟つたという話又その杉へお参りすると子供達の夜泣きが止むとか神がかりな話が多い。



3、雪と民話

雪女(その一)

白馬岳の麓の村に茂作と箕吉という父子の獵師があった。父子は冬になると決つたようにカモシカ捕りに雪の山へでかけるのだった。或晴れた日だった。二人はいつものようにオオシラビソの林をぬけ稜線にカモシカを追っている、と、ゴーという一陣の風とともに急に四方は暗くなり、粉雪がはげしく降つて来た。二人は獵を止め急いで獵師小屋へ逃げ帰つたが、雪はますます激しく降り続き、見る／＼積つて行つた。

その晩のことだった。ギーという小屋の戸の開く音に眼を覚した息子の箕吉は、ハッと思わず声をつまらせた。雪明りに見ると一人の美しい女が父の横に座つて、寝ているその顔の上に霧のような息を吹きかけているではないか。箕吉は驚き起き上ろうとするが体も動かないし声も出ない。と、女は箕吉の方に寄つてきて顔をつけるようにしてささやいた。

「あなたは若い人だ。あなたは殺しません。でもこれだけは守つて下さいよ、今夜こゝで私を見たことだけは誰にも話さないという約束を、」女はそう言い終るとスツツと戸の隙間から外へ出てゆつた。女が去ると体の自由をとり戻した箕吉は跳ね起きて父をゆり動かしたが、茂作は既に死んでいた。こんなことがあつた翌年の冬のことだった。音もなく降る雪の夜、見知らぬ若い女が箕吉の家を尋ねてき、ついに二人は結婚することとなる。そして十年の歳月が流れ、二人の間には五人の子供が生れて平和な生活が続いてきた。

ラジを作っていたが、ふと箕吉は十一年前の冬の夜のことを思い出して、「お前がこうして縫物をしている顔を見ると一昔前のことが思い出されるなあ」と一人言のように言つた。おゆきは「それは何ですか、どおいう話ですか」と聞き返した。「実はなあ、十一年前の冬だったが、」と悪夢のように思い出される父の死と雪女の話を始めると、黙つて聞いていたゆきは急に立ち上つたかと思うと、「とう／＼あなたは約束を破りましたわね、何を隠しましょう、あの時の女こそその妾です。然し子供のある今、あなたを殺すことはできません。子供のことは頼みます」と言つたかと思うと、ゆきは泣きながら煙のように目の前から消えて行つてしまつた。

雪女(その二)

昔十人もの子どもがいた、貧乏だがとつても人のいい夫婦があつた。大晦日の晩だった。年取りというのに魚も買えないがと、権十郎は子供の数だけやつと餅を手に入れて夕方に帰つてきた。「今夜はこれで年取りだ、我慢してくれやナ」と言うときのおいちは、「ぜいたくにはきりがありません、一家十二人まめつたくて年越しできることが一番幸しいね、子供達にお餅を一切れずつでも食べさせられて、ほんとに嬉しいだね」と、早速餅を焼き始め、子供達を呼んで、貧しくも楽しい一家の年取りが始まろうとしていた。

するとその時、戸間口が開いて、吹雪と一緒に一人の見知らぬ女が入つて来て、「私は旅の者、雪の道に迷ひ疲れて困つてます。どうぞ一晩土間で結構ですから泊めて下さい」と、すきとおるような青白い顔と低い声で言つた。夫婦は顔を見合せた。が、「いいともさあ上つて火にあたりますよ、何にもねえが火だけはたんと燃えたりして」と権十郎が言うとおいちも「さあ／＼上つて」と手をとりうとうとすると女は、「いえこゝで結構です、

お餅を一つだけ分けていただければ」と言つた。

夫婦は再び顔を見合せた。子供の数しかない餅だがと。しかしおいちは「子供には半分ずつで我慢してもらいましょ。それよりこの人が行き倒れになつたらそれこそ」と言い、焼きたての餅を盆に載せてさし出した。

こうして女は親切な一家から腹一杯餅をもらい、そのまゝ、土間に眠り込んでしまつた。そこで風邪をひいてはいけねーでと、すべて作つた布団をたんと掛けてやつた、そして朝になつてみると、そこには女の影形もなく、すべ布団がぐつしより濡れている。不思議に思いはぐつて見るとこれは驚き、そこには小判が沢山光つていた。親切な夫婦への雪神様のプレゼントだった。

地獄に落ちた男

これは大正の初め頃の話である。その頃小谷の村はどこも麻作りが盛んで、歳末にはこの麻を売つて年取り資金を得たもので、麻が売れないと暮れの支払いができなかつた。ところがそれを知つて暮れ近くなると悪徳商人が横行するのだった。

その年は例年になく大雪だった。麻商人の忠兵衛は、その大雪の中を、「それじゃとつても節季払いもできねえで、是非昨年の値に買つてくたせえ、お頼み申しやす」と言う百姓を相手に、強引な安値で買いたたいて歩いてきたが、ある朝、「それにしてもちと儲け過ぎたかな」と考えながら昨夜の大降り道形もない池原の坂を登つて来た。と、アツという間に彼の体は雪の中へ消えたかと思うと暗闇をぬつてストーンと尻もちをついて堅いものの上に落ちた。

見るもそこには大火が燃え、大鍋が掛けてあり、かたわらには赤ら顔の大男が座つていて。我にかえると同時に彼の脳裏に写つたのは「地獄絵図」だった。欲に抜け目はないが、

小心の彼は常日頃信心深い男で、生前悪業を働いた者は必ず地獄でエン大王の折檻を受けること教え聞かされてきたので、そこは地獄のエン様の前であるとして咄嗟に感ずくと「エン様お許し下さいませ、私が悪うございまして」とわめき出したのである。

ところが、大火を前に座つていた男は、歳末をひかえ多額な借金にいよ／＼思いつめて「雪かたづけしなきゃ、借金取りも入つてこめエ」と、近所の人は道を踏んだのにそれをやらずにいたので、忠兵衛はその家の煙出し穴を踏み抜き、板の間へ一挙に落つたのであつた。

雪崩遭難

雪山につきものは雪崩である。昔からどれ程多くの方がその災難に逢ひ死んでいることか、ちよつと数えただけでも、明治九年の鍾温泉引湯中の二十五人の死亡を始め、大正十二年三月の樺小沢の喜作父子の死、昭和二年大晦日の針ノ木雪渓での早大パーティーの事故などどれを取り上げても既にメルヘンの世界の物語りとなつていく。(終)

(白馬村役場・山博調査員)



山と博物館 第23巻 第10号
一九七八年十月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二二一
大町山岳博物館
印刷所 大町市 俵町 大栄タイムス印刷部
定価 年額八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)